平成14･15･16年度　文部科学省委嘱

学力向上フロンティアスクール

自ら学ぶ力を育む学習活動の創造

～学力向上を図るための教育実践～

石川県かほく市立高松中学校

はじめに

21世紀において、世界にはばたく日本人をめざし、基礎基本の定着だけでなく、「生きる力」を併せ持つ生徒の育成が必要であると考えます。これからの日本人には、今まで以上に自己表現力とコミュニケーション能力及び新しいものを生み出す創造力が求められています。

本校は、平成14年度より16年度にかけて学力向上フロンティアスクールとしての指定を受け、「自ら学ぶ力を育む学習活動の創造」－学力向上を図るための教育実践－ をテーマに研究を進めてきました。課題解決型学習のあり方とその学習における支援と評価を研究の柱に据え、生徒の自己表現力を高め、学力の向上をめざしてきました。授業においては、生徒が何を学習するのか課題を把握し、それを自分で追求し、深め、まとめるという学習を基本に取り組んできました。教え込みが主になりがちであった授業から生徒の側に立ち、生徒自らが学ぶ授業の構築を意図し努力してきました。その結果として、以前より生徒に発表力がつき、学習への積極性も見えはじめております。

本発表会を研究の終わりとするのではなく、参観の皆様からのご指導、ご感想を真摯に受け止め、生徒の学力向上のために努力を継続していきたいと考えております。

最後になりましたが、３年間温かくご指導いただきました石川県教育委員会、金沢教育事務所の指導主事の皆様方、かほく市教育委員会に心から感謝申し上げます。

平成16年11月19日

学校長　岡田　　正

目　次

学校全体構想 …… 1

Ⅰ　研究の概要

１．主題と研究の基本構想 …… 2

２．研究組織と今年度のあゆみ … 3

３．研究の経過 …… 4

Ⅱ　研究の取り組み

１．課題解決型学習の授業展開 … 6

２．支援と評価について …… 7

３．少人数学習の授業実践 …… 8

４．自己表現力を高めるために … 9

５．アンケートによる実態把握と家庭学習のすすめ …… 10

Ⅲ　研究の成果と今後の課題 …… 11

表紙絵：３年１組　高井元基

高松中学校 教育目標

学校全体構想

知性と創造力に富み、心身ともに健康でたくましい生徒の育成

国際的視野に立ち
郷土を愛する生徒

心の痛みがわかり
思いやりの心を持ち
協力奉仕のできる
心豊かな生徒

集団の向上をめざし
規則を守る
礼儀正しい生徒

命を大切にし
進んで身体を鍛える
たくましい生徒

自分の夢の実現のために
自ら考え、真剣に取り組む
意欲的な生徒

校訓
「責任を果たせ」
自主・共同・責任

生きる力

学力の向上　　**豊かな心の育成**

教科、道徳、特別活動、その他の教育活動

総合的な学習

生徒指導の充実

家庭・地域との連携

Ⅰ　研究の概要

1 主題と研究の基本構想

生徒の実態

○素直で礼儀正しい
○指示されたことは一生懸命取り組む
●受身的な学習態度
●自分の意見に自信がもてない

研究主題『自ら学ぶ力を育む学習活動の創造』
～学力向上を図るための教育実践～

課題解決型学習の授業展開

個に応じた支援と評価の充実

研究仮説

上記の２つの取り組みを、互いに関連させつつ実践を継続していけば、「確かな学力」の向上につながり、「自ら学ぶ力」を育むことができる。

◇本校がとらえる「確かな学力」と「自ら学ぶ力」とは

「確かな学力」

・**学んだ力**＝各教科の基礎的・基本的な知識・技能
・**学ぶ力**＝学び方
　┌ 問題解決の思考・判断力
　├ 問題解決の技術と自己表現力
　└ 一人で・みんなと・先生と学ぶ
・**学ぼうとする力**＝学ぶ意欲・関心・態度

→

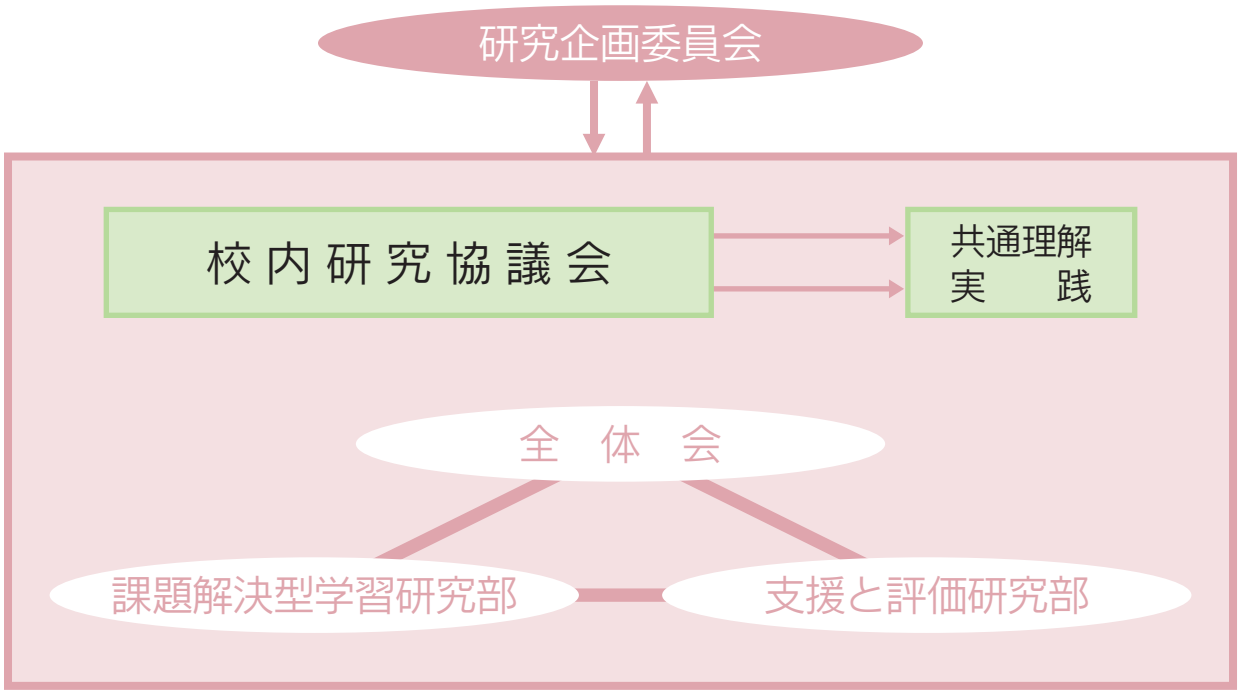
「自ら学ぶ力」

・さまざまな事柄に対し興味を持ち、意欲的に取り組むことができる力
・自ら課題を持ち、それを解決していくための方法がわかり、自分なりに解決し、その経験を生かすことができる力

→

生きる力

2 研究組織と今年度のあゆみ



	全　体　会	課題解決型学習研究部	支援と評価研究部	生　　徒
一学期	・研究の方向			・学習に関するアンケート①
	・提案授業	・課題設定の工夫 ・課題の表現方法	・評価方法や生徒の動き ・個に応じた支援の方法	・結果のお知らせ 学校便り、掲示 〈家庭学習の啓発〉
	・一学期学校公開	**教科別分科会** ・生徒にとって価値のある課題設定の工夫について ・本時のねらいとする観点を評価する場面について		・学習エール旬間 〈基本的学習習慣の定着、グループによる反省〉
				・学習に関するアンケート②
二学期	・提案授業	・「ねらい」と対応した課題の文末表現		・学習に関するアンケート③
			・観点別支援の具体例 ・生徒が励まされる言葉や働きかけ	・結果のお知らせ 学校便り、掲示 〈家庭学習の啓発〉
	・１学期の研究をふまえての授業実践			
	・研究発表			・学習エール旬間

3 研究の経過

平成14・15年度

1　**個を生かすための教育課程の工夫・改善**
　時間割の編成、学校裁量の内容、選択教科と総合的な学習の時間

2　**選択教科における個性を伸ばすための指導体制と教材の開発**

3　**必修教科における学力向上を図るための指導方法と意欲を喚起する評価の工夫**

4　**学力向上につなげる総合的な学習の時間の積極的実践**

向上させたい学力＝自己表現力

本校生徒の実態から考え、まず育てたい学力として「自己表現力」があげられた。自己表現力を高める手だてとして以下のような実践を行った。

・授業面から → **授業展開の工夫**…**考えを持たせる場面の設定**
グループ活動…自分の考えを表現する場面の設定
基礎・基本の定着とその評価方法
…どの場面でどのような支援をすべきなのかを
明確にする（意欲を促す声かけ）
文化祭に向けての取り組み（総合的な学習）での表現活動の実践

・特別活動面から → **帰りホームでの指導**
（司会者への指導…進め方、声量）
全学級で生活目標についての反省
学習エール旬間のグループによる反省
学級独自のテーマについての実践

・生徒指導面から → **授業終始の礼の声**
職員室出入りの際の声
（教師の応対の仕方）

平成16年度

平成14・15年度の取り組みで、「自己表現力」は着実に身についてきており（学習エール旬間アンケート結果より）、本年度は、昨年までの自己表現力の育成を基盤におきながら、研究の柱を「課題解決型学習の展開」と「個に応じた支援と評価の充実」の２本とし、研究を進めてきた。

今年度の研究内容

1　学ぶ喜びを持つための課題解決型学習の工夫

2　学力向上に向けた評価規準の作成と評価を生かした授業展開

3　豊かな表現力をつけるための場の設定と効果的な支援方法や評価の工夫

4　習熟の程度に応じた少人数指導等の工夫改善

●提案授業・公開授業の実施

研究内容の共通理解

・課題解決型学習の授業展開
・評価と個に応じた支援場面の設定と内容
・習熟度に応じた少人数指導の工夫改善

●学習エール旬間の実施

・基本的学習習慣の定着
・帰りホームでのグループによる振り返り

●学習についてのアンケート実施と広報活動

生徒・保護者の学力に対する考えを知るとともに、生徒には家庭学習の大切さを説いた。また、家庭にも学校の考える学力について、学校だより等を通じてお知らせし、保護者がより深く子どもの学習に関心を持ち、認め励ますことにより、家庭と学校の両面から学力向上をはかる。

II　研究の取り組み

1 課題解決型学習の授業展開

自ら課題を見つけ、自分の考えを述べ、仲間と切磋琢磨して学ぶ喜びを持つことができるのが、「課題解決型学習」と考え、昨年度までこのことをを基盤に置きながら授業に取り組んできた。本年度は「課題解決型学習」をより深めるために、５月、７月の提案授業を全員で参観して、課題の条件・課題提示の明確化・課題の表現・課題解決型学習の展開について共通理解を図りながら研究を進めてきた。

ねらいに迫るための課題設定　〈５月の国語・数学の提案授業から〉

・生徒からの疑問点を生かしつつ、教師のねらいに沿った課題設定が望ましいが、登場人物の心の重なり合いを読み取り主題に迫るためには、課題の絞り込みや言葉の吟味が大切である。

・課題設定の時、課題の中味をより焦点化していくことで、生徒の思考を揺さぶり、読みを深めていくことが可能である。

・毎時間の授業で、特に重視したい「ねらいとする観点」を一つに絞り、ねらいに即した課題を黒板に示し、生徒への意識化を図った。

課題の条件

・生徒からの疑問点を一覧に示し、その中で学級全体で取り組む課題として適している課題かどうか決定し、生徒の実態に沿った課題であった。

・課題は、教師側のねらいに沿った課題でもなければならない。そのためにも、生徒の解決したいことと教師の考えるねらいと整合性があるか常に検討しながら、取り組んでいくことが大切である。

課題の表現　〈７月の社会の提案授業から〉

・ねらいとする観点を何にするかによって課題の文末表現が変わってくる。

〈例〉	「技能」のとき	文末表現は「説明しよう」
	「思考」のとき	文末表現は「説明の仕方を考えよう」
	「知識・理解」のとき	文末表現は「説明の仕方を学ぼう」

生徒にとっての価値ある課題

・教師側の「こんな力をつけさせたい」という思いと、生徒側の「この課題に取り組みたい」「この課題は自分たちの課題だ」という思いが一致した課題が価値ある課題といえる。そして、生徒が真に自分たちの課題として取り組むよう仕掛けたり粘り強く待つことが大切である。

2 支援と評価について

⑴支援と評価の一体化

各教科評価規準を検討し、授業内における評価は、支援のためのものであることを確認し、B基準に到達できるような支援とB基準からA基準へと伸びるように支援を行った。各教科で「観点別支援の具体的な例」を検討し、授業に取り入れた。

⑵「やる気」がでる働きかけ

生徒はどのような教師の働きかけで、「やる気」がでるか、生徒の生の声をアンケートにより把握し、授業の中に取り入れ、向上心を促す支援を行った。

「どのようなほめ言葉が嬉しかったか」

「頑張ったね」「すごい」「よくできたね」

「どのような言葉や働きかけに励まされたか」

「もう少し」「もちょっと」「いい線きてるよ」「おしい、もう少し頑張れ」「頑張れ」「頑張ればできる」

丁寧に教えてくれた。分からないところを教えてくれた。授業が終わっても教えてくれた。

⑶自己評価表への取り組み

生徒による自己評価について、各教科でサンプルをもとに作成し、授業終了時や単元終了後実施した。

生徒が自分の学習を視点を持って振り返ることができるようになり、教師は、生徒を具体的に理解できるようになるとともに、指導の改善の手がかりが得られ、支援の具体的手立てができた。

（自己評価表サンプル）

今日の授業を振り返ってみよう

1．意欲的に課題に取り組むことができましたか。	4	3	2	1
2．日本がどこにあるか、自分なりに説明することができますか	4	3	2	1
3．授業を終えて感じたこと・気づいたこと				

本時の内容にあった、教科独自の自己評価

※教師はコメントを記入しアドバイスする。

③ 少人数学習授業の実践

数学・英語科においての少人数学習も２年目を迎え、昨年と同様に数学・英語科ともに１学級を２つの集団に編成している。

数　学　科

学習集団の編成の方法については習熟度別学習集団とし、単元ごとに既習事項の確認テストを行い編成している。２つのコースの内容について、

コ ー ス	編成人数	コースの内容
じっくりコース	９人～14人	より少ない人数でじっくり学習し、基礎・基本の定着を図る。時間の関係で難しい応用問題はできない可能性がある。
チャレンジコース	15人～20人	通常より少ない人数で学習を行ない、基礎・基本をもとに、応用問題にチャレンジし、応用力を身につける。

期間としては、１年生は、学習習慣を身につけることに重点を置いたため、最初の10時間を Ｔ・Ｔ でスタートし、その後編成をした。２年生と３年生は最初の授業で確認テストを実施し、少人数授業をスタートさせた。「じっくりコース」への希望者が多く、人数調整により、本人の希望ではなく、定期テストなどを参考にしながらの習熟度別コース編成になった。少人数授業では生徒の反応がよく、生き生きと学習に取り組んでいる姿が見られた。

「じっくりコース」での授業では、理解度は上がったが、確かな定着にはまだまだ時間が必要である。

３年生のアンケートからも肯定的な意見が多く、少人数学習は学力向上に十二分な効果があると思える。

英　語　科

昨年の試みを参考に、各学年の違いを踏まえた上で取り組みを続けてきた。確認テストやこれまでの学習を振り返らせるアンケート及び希望調査を参考に、２つのクラスに分ける。

コ ー ス	編成人数	コースの内容
Basicコース	10人～20人	教科書を重点的に用いて、基礎・基本を徹底的に指導・支援する。
Advancedコース	13人～22人	教科書で学習する事項をより発展させ、自己表現の機会をより多く与える。

１年生は、１学期は等質編成、２学期になれば、個人差がある程度見られるため、２学期の上旬から習熟度別編成。２・３年は、基礎・基本の定着度の視点から、個人差が歴然としているため、スタートから習熟度別編成で授業を行った。（ただし、２年生は、週に１回とし、２回は合同授業）

少人数の授業に対しての生徒の感想は、「理解しやすい」「授業に参加しやすい」など好評で、違和感なく少人数学習に取り組むことができた。

4 自己表現力を高めるために

(1)グループ反省会の意義

個人の反省 → グループの反省

話し合い → 発表する機会 → 自己表現力

(2)エール旬間時の帰りホーム20分間のタイムテーブル

～　前半10分以内　～	～15分　～18分　～19分　～20分
明日の予定／係り・委員からの連絡／当番反省	グループ反省／代表者発表／学級代表から／先生から

(3)グループ反省会の持ち方

方　式

- 話し合いのグループ（生活グループ4～6名）
- 進行、記録、発表者決め（固定または輪番）

進め方

〈学級司会の流れ〉

(1)エール旬間の反省を各グループで行ってください

各グループの話し合い

(2)それでは1班から報告してください。

(3)学級代表の○○さん、講評をお願いします。

(4)ありがとうございました。先生、お願いします。

〈グループの進行の流れ〉

①エール旬間の反省を行います。
②きょうの「ベル学」の取り組みについて、○○さんから反省を言ってください。
③きょうの皆さんの態度について意見はありませんか。
④では、全体では「……」と発表してください。

話し合いのルール

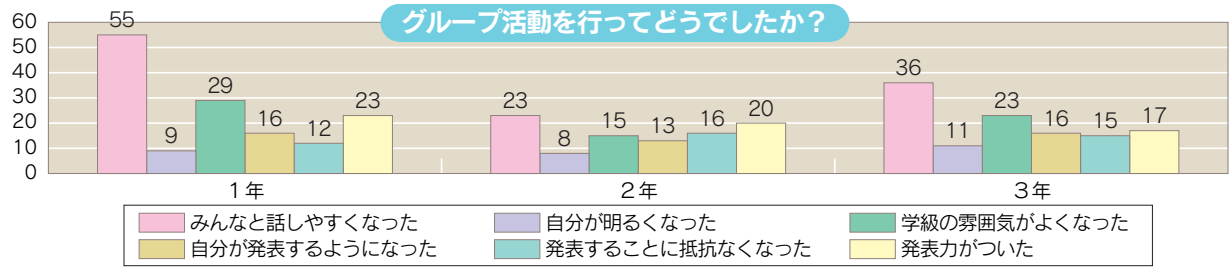
- 進行役に従う。
- 意見を言うときは、挙手をし、進行役に分かるようにする。
- 友達の意見や報告を、むやみに笑ったり冷やかしたりしない。
- 友達が発言しているときは他の人と話をしない。
- 意見が少ない、出ない場合は、進行役は個人を指名し意見を聞く。

発言の仕方

- ～だと思います。
- それは、～だからです。
- ～について説明します。
- ～さんに賛成です。
- ～のところがよく分かりません。もう一度説明をしてください。

〈生徒のアンケートから〉

グループによる学習エール旬間(H16.5.18～26)の反省アンケート結果



5 アンケートによる実態把握と家庭学習のすすめ

⑴学習に関する意識調査の実施

４月に生徒・保護者・教師を対象に『必要と考える学力は？』、『期待する授業は？』『子どもがうれしい、よかったと感じるとき』の３項目と家庭学習の時間についてアンケートを実施した。

①必要と考える学力は（８項目中３つ選択）

生　徒…… **基礎的な知識の習得**、じっくり考える力、興味を持って取り組む力

保護者…… **基礎的な知識の習得**、興味を持って取り組む力、正しく判断する力

②期待する授業（８項目中３つ選択）

生　徒…… **グループで話し合い友達と相談できる授業**、自分の意見が取り入れられやり方が選べる授業、一人でじっくりと考えられる授業

保護者…… **自分の意見が取り入れられやり方が選べる授業**、一人でじっくりと考えられる授業、グループで話し合い友達と相談できる授業

③生徒が「うれしい」「よかった」と感じるとき（８項目中３つ選択）

生　徒…… **テストの点数がよかったとき**、難しそうな問題が自分で解けたとき、自分の考えた予想や答が合っていたとき

保護者…… **先生や友達から褒められたり認められたりしたとき**、難しそうな問題が自分で解けたとき、自分の考えた予想や答が合っていたとき

結果は生徒も保護者も、基礎的な知識の習得を第一に掲げ、課題に対して興味をもって取り組み、じっくり考え自分の意見を持ち判断し、その結果が満足いくものであったとき、学ぶ喜びがあるとしている。これは学校が生徒に身につけてほしいと考える『自ら学ぶ力』と一致している。

⑵家庭学習の意欲を高めるための掲示

学力向上には、授業はもちろんであるが、家庭学習の継続も大切である。しかし、本校生徒は４月当初のアンケートによると１時間未満の生徒が大半を占める状況であった。掲示や集会の機会を利用して家庭学習の大切さを伝えた。７月に実施した２回目のアンケートでは若干ではあるが家庭学習の時間が延びた。

⑶学校だより『さわやか』や学年だよりによる家庭への広報活動

アンケート結果を家庭へも提供し、保護者にも関心を持っていただくと同時に保護者から意見をもらい、学習に関しても家庭と学校の連携を図った。

Ⅲ 研究の成果と今後の課題

1 成　果

⑴課題解決型学習の授業展開により

①課題の条件や表現を工夫し、生徒にとって価値があり、ねらいとする観点にそった課題を提示することで、生徒が学習に意欲的に取り組むようになった。

②課題に対して、自分なりの考えを持ち、友達と深め合うという学び方が身につき、教科だけでなく総合的な学習など学校生活全般の中でも生かすことができるようになった。

⑵支援と評価により

①言葉かけ、朱ペン、自己評価など個に応じた支援や指導展開を工夫することで授業の中でB基準に達する生徒が多くなった。

②単元の評価規準表を見直し、１時間の授業においてねらいとする観点を１つにしぼったことで評価がしやすくなった。また、評価の結果によって個に応じた支援ができ、意欲的に授業に参加する生徒が増えた。

③自己評価により生徒は自分の学習活動を振り返ることができ、教師も生徒の理解度や興味・関心の程度が分かり、指導の一助となった。

⑶教師の共通理解

研究を通して教師の共通理解を図ったことで、　課題や評価を意識した授業展開を心がけるようになり、生徒の成長を願いその他の諸活動においても一層協力して取り組むことができるようになった。

2 課　題

⑴課題解決型学習の授業展開の継続とともに、さらなる学力の向上のためにB基準やA基準に達している生徒への発展的学習の支援も研究していかなければならない。

⑵生徒の知的好奇心をゆさぶり、変容を確認していくためにも発問の工夫、板書の活用、よりきめこまかな支援のあり方などの研究をさらに進めていかなければならない。

⑶「生きる力」や「確かな学力」の理解をより深めるために、アンケート等による生徒・保護者の意識調査と広報活動の継続が必要である。

おわりに

平成14年度から、文部科学省より「学力向上フロンティアスクール」の委嘱を受けてから２年と７ヶ月、生徒・教職員共にフロンティアスクールとしての誇りを持ちながら研究を進めてきました。

全職員で迷いながら、悩みながら「学力とは何か」を考え、研鑽し、徐々に生徒も教職員も力をつけてまいりました。今後も生徒に「確かな学力」「自ら学ぶ力」を身につけ「生きる力」を育んでいくために、より実践を推し進めていきたいと思います。

今日までの研究の成果は、地域と保護者の学校への理解と協力、そして、地域と保護者から愛されている生徒たちあってのものと思います。

誠に拙い教育実践ではありますが、この間暖かくご指導いただいた関係の皆様に感謝を申し上げるとともに、今後尚一層のご支援を賜りたくお願い申し上げます。

教 頭　西尾　正則

研究同人

岡田　正	西尾　正則	荒川めぐみ
宇野　直子	奥村　浩二	酒井　圭子
正元　三巌	塚田　真理	中田　一朗
中橋　奏恵	西尾　茂人	架谷　博子
伴　卓也	藤本　浩	松井三枝子
松島　智洋	松田　晶子	三輪　真也
山中　努	川渕　晴代	幸内　清美

15年度

稲葉　紘	柴田　直樹	大路　貴之
茶谷　学	寺田　嘉予	杉澤　直美
浪元　健司		

14年度

荒山　浩	夷藤ゆう子	宮坂　稔
宗田真知子	森　周一	山崎　由勝